

格非「迷い舟」

人文社会系研究科日本文化研究専攻

日本語日本文学専門分野 修士課程一年

土井 美智子

蕭の行動は、二人の人物に対する想いによって絶えず規定されている。その二人とは従姉妹の杏と父である。果物の香りと結びつけて描かれる杏は、蕭にとっては性的な欲望の対象である。過去の回想に導かれて、蕭は既に三順と結婚していた杏と不倫の関係を結ぶことになる。一方の父は、特に戦争に対する姿勢において蕭が意識する存在として表されている。他界した父についても繰り返し回想が提示され、父の意思と自らの行動とが照応され検証されるのである。生前の父と同じ道具と場所で、しかも杏の家を見渡しながら釣りをする場面に象徴的であるが、父の理想の模倣と杏への思慕とは蕭の抱える二重の欲望であり、両者は蕭の意識において矛盾することなく統合されていたと言うことができよう。

蕭の帰郷は、父の葬儀のためであると同時に、所属する軍の指令で小河村を調査する必要からでもあった。蕭の所属する孫伝芳軍は、蕭の兄の属する北伐軍との戦闘の直中にある。要衝の地榆関は兄自身の率いる部隊によって占領されているのであり、孫伝芳軍は明らかに劣勢である。蕭は、自分が孫伝芳軍に身を投じたことは「父の望みに背いたのではなかったか」という疑いを次第に確信にまで強めていくが、それは、兄が北伐軍に連なる黄埔軍官学校に入ることと父が称賛していたことを知りながらも、敢えて敵対する軍を選んだためであり、また、現実には自軍が滅亡へと向かっているからでもある。

父もまた、小刀会の頭領として戦い、戦争に敗れたという経験を持つ。蕭はかつて、父に向かって、「どうして負けた軍隊に入ったの？」と問うたことがある。父はそれに対して「軍隊に、負ける軍隊とか勝つ軍隊とか、そんな

ものはない。あるのは狼と狩人だけだ」と答えている。しかし、手中の部隊を失ってからは「死んだも同然」の隠棲生活を続けていたとされる父は、「負けた」体験を一生引きずって生きた人物だと言つてよい。父の兄に対する称賛とは、負けた体験への自己否定からくる勝つ軍隊への憧れである。父の「負けた」体験、父自身が否定的に捉えていた父の立場を踏襲する立場に近づいているからこそ、蕭は自らの選択を父の望みに反するものと考えなければならなくなつたのである。

蕭は、自軍の全滅を予言する父の書簡を読んで、「強烈な負けん気」を感じ、「無謀であっても戦うしかない」と、部隊へ戻る決心を一度は固める。だが結局は、蕭は部隊のある棋山へは戻らない。蕭との密通の発覚により夫三順の手で去勢され、実家の楡関へと送り返されている杏の元へと向かうことを選ぶのである。

ここで蕭の楡関行きは、「杏のことを想つた」ため、杏を去勢へと導いた「罪の意識」のためと語られているが、先にも触れた通り、杏のいる楡関とは、蕭の兄率いる北伐軍の部隊が占領している地域である。開戦直前の緊迫した状況にあつて、不倫相手に会うために敵地へ単身赴くというのは尋常の行動ではない。まして敵を率いるのが兄という身近な血縁者であるならばなおさら、孫伝芳軍への忠誠心を示す意味でも楡関には近づくべきでないと判断するのが当然であろう。

にもかかわらず敢えて楡関に向かつたのであるから、蕭の目的は単に杏を訪れるためだけではありえない。監視者であつた部下の護衛兵が指摘する通り、北伐軍に孫伝芳軍の戦略を密告するためであつたと考えられるのである。蕭が「拳銃を持つてくるのを忘れ」て完全な丸腰で楡関へ向かつたのも、北伐軍に対する恭順の態度を誇示するためであろう。楡関に向かう途上で蕭は杏の夫三順と出会い、命を狙われるが、三順は結局蕭をギリギリまで追いつめながらも何故か殺害を放棄して立ち去る。このとき三順は蕭が棋山ではなく楡関へと向かつていることを確認して蕭を逃すのであり、三順の行動は蕭が北伐軍に寝返ろうとしていることを理解したためであつたと捉えることができる。

う。

蕭は榆関へ赴くことで、孫伝芳軍への謀反と北伐軍への協力を実行する。蕭は榆関から再び小河村へと戻ってくるが、これは不倫（Ⅱ杏への性的欲望）と謀反（Ⅱ北伐軍側への寝返りによる、父の失敗を踏襲することの否定と父の理想への一体化）とを成し遂げた上で、戦友である護衛兵の手を借りて自らの命を断つことを選んだからにはかならない。杏への性的欲望と父の意思への一体化の欲望とはいずれもネガティブな形で達成されたのであり、蕭はその決着を、戦友の手による死という形でつけることを意図したのである。

蕭は父の言葉通り、「追い詰められた狼のように」逃げ、狩人としての護衛兵によって撃たれる。勝つ／負ける軍隊という分類はここではじめて否定され、戦争とは結局個人間の殺し合いであるということが最後の場面において具体的に示されるのである。

亡霊のテキスト／テキストの亡霊

——余華「アクシデント」のためのマニフェスト——

文学部言語文化学科日本語日本文学3年

梶尾文武

これは亡霊に紡ぎ出されたテキストの亡霊である。

*

この小説「アクシデント」は、ある喫茶店で起こった殺人事件と、それに立ち会った二人の男の事件をめぐる解釈Ⅱ手紙の応酬を機軸として、展開されている。そして二人の男たち自らが、同じ喫茶店において殺人を反復してしまう。これがこの小説の終局である。